



## 説教要旨 「惨めさを見つめて」

ルカによる福音書16章19～31節

死後の世界に入った二人、金持ちと貧しいラザロの対比する話をイエス様は語られました。「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らして」(19節)いた金持ちは陰府において、炎にさいなまれ、もだえ苦しむこととなります。一方、この金持ちの門前に横たわっていた貧しいラザロは「天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた」(22節)のです。

助けを求める金持ちにアブラハムはこう告げます。「子よ、思い出してみるのがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ」(25節)。善人であったからラザロはアブラハムのすぐそばに迎えられたのではないし、悪人だったから金持ちは苦しんでいるのでもありません。ただ、生きている間に良いものをもらっていた者と悪いものをもらっていた者との立場の逆転が、死において起ったのだとアブラハムは言っています。陰府でさいなまれる金持ちとアブラハムのふところに入れられたラザロとの違い。それはただ、神の憐れみにすぎるしかない者であったかどうか、です。

犬にまで憐れみをかけられるほどラザロは、どうしようもなく惨めな存在でした。しかし神様にとっては、この金持ちも、ラザロも、そして私たちも一樣に惨めな存在なのです。問題は自らの惨めさを受け入れ、認めることができるかどうかです。神の憐れみによって多くの賜物を与えられて、私たちは今を生かされています。私たちは私たちの人生において、自分の力のみで得たものは一つもないはずですが、しかし私たちは、自らの努力によって今の生活を築き上げたような錯覚に陥り、しまいには困窮している人に対して「怠け者」「自己責任だ」などという心ない言葉が投げかけられる社会にしまっているのです。

自らの惨めさを見つめるならば、すぐ目の前で苦しんでいる“ラザロ”を放っておくことなど出来なくなるのではないのでしょうか。